

マレーシア語の焦点表現と名詞述語文*

野元 裕樹, アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー

1. はじめに

本稿では、特集のアンケート項目に基づき、マレーシア語の焦点表現と名詞述語文について概観する。それぞれ第 2 節、第 3 節で扱う。アンケート項目のうち、これらの節で議論されないものは、第 4 節に収録する。特集アンケートでの例文番号は【 】に入れて示す。

本稿で示すデータは、マレーシア国内の地域方言の差を超えて使われる、マレーシア語の標準方言のものである。標準方言においては、書き言葉と話し言葉があり、2 つの変種の間差は大きく、ダイグロシヤ状況を生んでいる。本稿のデータは基本的に話し言葉のものである。特に、もっぱら書き言葉で用い、話し言葉ではあまり用いない文については、その旨を示す。例文はアズヌール・アイシャが特集アンケートの日本語文に基づいて作った。また、文のイントネーションを示すピッチ曲線図もアズヌール・アイシャの発話に基づくものである。

2. 焦点表現

焦点 (focus) とは、直感的に言えば、文の意味のうち、聞き手の注意をそこに集めるために、話者が取り立てて提示している部分のことである。そのため、日本語学では「取り立て」と呼ばれたりする。例えば、健が直美と食事した、という一つの事態を考えよう。どの部分を取り立てるかによって、話者は様々な表現の中からふさわしいものを選択できる。直美に好意を抱いている、健の親友が健の裏切りとも取れる行為に失望して、この事実全体を取り立てて伝える場合の表現形式は、(A) (「どうしたの?」—)「健が直美と食事した (んだ)」だろう。この状況では、(B)「健は直美と食事した」は、伝えられる事態は同じだが、意味的に不適格となる。同じ状況でも、直美と食事したことがあるのが健だけで、自分は食事したことがない、というように、自分との対比で健を取り立てて伝える場合には、(B)が適格で(A)は不適格になる。いずれも、生じている事態は同じであるので、異なる表現形式が伝える意味の違いは、文の論理的意味 (真理条件) に関わるものではなく、その提示の仕方 (「情報のパッケージング」(Chafe 1976), 情報構造) に関わるものである。

* 本研究は JSPS 科研費 26770135 の助成を受けたものである。ピッチ曲線図の作成にあたっては、マレーシア国民大学の Shirley Anak Langgau 氏の協力を得た。ここに感謝の意を記したい。

上の例に見て取れるように、焦点表現は疑問詞疑問文とその返答や対比の文脈で顕在化することが多い。何かを取り立てるには、その何かと同一範疇の取り立てられないものの存在が前提となるからである。疑問詞疑問文の意味は普通、その答えの候補 (alternative) となる命題の集合であると分析される (Hamblin 1973)。例えば、「誰が直美と食事したの？」という文の場合、前段落のミニ会話の話者を「聡」とすると、その意味は{聡が直美と食事した、健が直美と食事した、仁が直美と食事した、...}となる。疑問詞疑問文の答えは、その中の1つが真であることを明言する。対比も同様に、候補の集合が関与する意味現象である (Rooth 1992)。焦点となる部分以外(「背景 (background)」という)の特徴を満たし得る候補の集合があって、その中の特定の候補と他の候補が対比される。前段落の2つ目の事例では、健と話者はともに直美と食事をする可能性がある候補だが、当該の文により健が直美と食事をしたことが明言される。それにより、明言されていない、話者自身は直美と食事をしていないということが含意される。

以下、焦点となる部分の意味タイプごとに、マレーシア語での表現のされ方を見ていく。2.1-2.2節では焦点が項(=事態の参与者)の場合、2.3節では焦点が述語(=動作、状態、特徴)の場合、2.4節では焦点が命題(=平叙文が伝える意味内容)の場合を扱う。項焦点は、対比の効果が前面に出るもの(2.1節)と疑問詞疑問文とその返答(2.2節)に分け記述する。

2.1. 項焦点：対比

項を焦点とする場合、(1)のように、明示的な主名詞を伴わない、自由関係節 (yang ~) を主語とし、焦点となる項の名詞句が述語部分に来るような擬似分裂文が多用される。日本語で主語が焦点となる場合のほとんどが、述語を焦点とする擬似分裂文で表される(主語のまま焦点化される例は、(4c)を参照)。この構文は、日本語では「～なのは、NP_{焦点}だ」という形式に相当する。述語部分には、さらに、肯定の焦点小辞 lah が生起することも多い¹。(1b)は、(1a)の述語部分が前置したものである。

¹ 筆者の知る限り、最初に小辞 lah を焦点に関係するものとして記述したのは Mashudi (1981)である。Mashudiは他に、小辞 kah, tah, pun も焦点の形態素 (focus morpheme) と呼んでいる。Nomoto (2006)はさらに pula, juga も焦点小辞と呼んでいる。いずれも焦点との関連付けの根拠は、焦点前置 (focus fronting) という統語現象である。しかし、本稿で見ると、意味的にも焦点と密接な関連がある。

- (1) a. Yang saya beli di kedai semalam tu, buku ini(-lah).² 【11】
 REL 1SG buy at shop yesterday that book this-LAH
 b. Buku ini(-lah) yang saya beli di kedai semalam tu.
 book this-LAH REL 1SG buy at shop yesterday that
 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」

明示的な対比を伴う、下の例でもやはり、(2a-b)のように、自由関係節による擬似分裂文を用いるのが、最も自然である。(2a)と(2b)の lah は、タイプが異なる。(2a)の lah は、述語である Razmi でなく、文全体に付加している談話小辞である。一方、(2b)の lah は上の(1)の lah と同様、述語部分に付加する肯定の焦点小辞である³。

- (2) Eh, Razak pun datang? 【1】
 oh Razak also come
 a. Tak. Bukan Razak, Razmi yang datang-lah.
 no not Razak Razmi REL come-LAH
 b. Tak. Bukan Razak, Razmi(-lah) yang datang.
 no not Razak Razmi-LAH REL come
 c. #Tak. Bukan Razak, Razmi datang-lah.⁴
 no not Razak Razmi come-LAH
 d. ?Tak. Bukan Razak, Razmi(-lah) datang.
 no not Razak Razmi-LAH come
 「えっ、ラザクも来たの？—いや、ラザクじゃなくてラズミが来たんだ。」

(2c-d)のように、関係詞 yang による擬似分裂文構造を取らない場合、小辞 lah の種類により、容認性に違いが生じる。(2c)のように、談話小辞の lah をとる場合、この文脈では容認不可能である。一方、焦点小辞の lah を含む、(2d)は、yang がある場合に比べ、容認度が下がるものの、容認可能である。また、yang がない代わりに、焦点部である Razmi に続く

² 本稿で用いる略号は Leipzig Glossing Rules に従う。

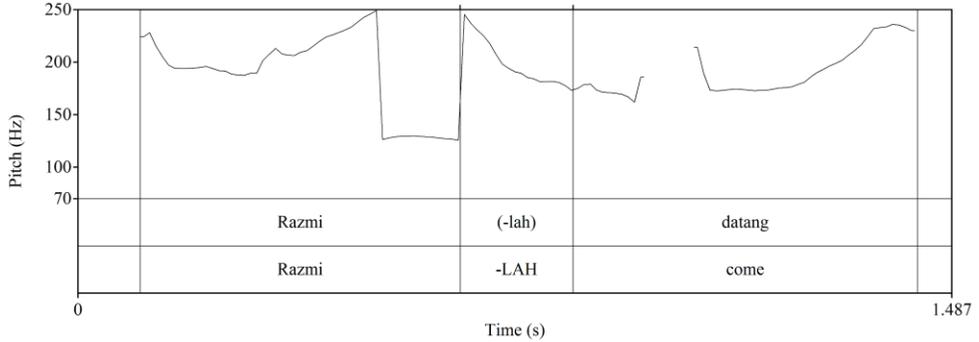
³ 小辞 lah の機能については、Goddard (1994)が詳しい。

⁴ 「#」は当該の文が統語的には文法的であるものの、意味的に不適格であることを示す。この文は、次のような対比を伴わず、Razmi が焦点化されない文脈では自然である。

- (i) Razmi tak datang ke?— Tak. Razmi datang-lah.
 Razmi not come Q no Razmi come-LAH
 「ラズミは来なかったの？—ううん。ラズミは来たよ。」

lah に下降調のイントネーションを伴わなければならない。

(3) (2d)のピッチ曲線図



(4)も明示的な対比を行う文である。しかし、上の(2)と違い、焦点構造の背景部分（「背景」の概念については第2節冒頭の説明を参照）が動詞句でなく、形容詞句である。(2)では容認度が低かった、(4c-d)のような、関係詞 yang による擬似分裂文構造を取らない形式が容認されるのは、このためであろう。

(4) Bukan-kah Razak punya lagi besar? 【3】

not-Q Razak POSS more big

- a. Tak. Bukan Razak, tapi Razmi punya yang lagi besar-lah.
no not Razak but Razmi POSS REL more big-LAH
- b. Tak. Bukan Razak, tapi Razmi punya(-lah) yang lagi besar.
no not Razak, but Razmi POSS-LAH REL more big.
- c. Tak. Bukan Razak, tapi Razmi punya lagi besar-lah.
no not Razak but Razmi POSS more big-LAH
- d. Tak. Bukan Razak, tapi Razmi punya(-lah) lagi besar.
no not Razak, but Razmi POSS-LAH more big.

「ラザクの方が大きいんじゃないの？—いや、ラザクじゃなくて、ラズミの方が大きいんだよ。」

(4c)と(4d)では、統語構造とイントネーションが異なる。談話小辞の lah を取る(4c)では、焦点部分の Razmi punya は主語であり、非述語部を特徴付ける、上昇調のイントネーションで読まれる。一方、焦点小辞の lah を取る(4d)では、焦点部分の Razmi punya は述語であり、上の(2d)と同様の下降調のイントネーションを伴う。いずれも Razmi punya が焦点であ

ることから、イントネーションの違いは焦点構造でなく、統語構造と相関していることが分かる。

(2)と(4)では、焦点部が擬似分裂文を用いなければ、主語の位置にあった。次の(5)–(6)は、焦点部が目的語の部分にある例である。この場合、(a)のような通常の平叙文でもよいし、(b)–(c)のような擬似分裂文でもよい。(c)で lah がいない場合には、やや長めのポーズが入る。このポーズはコンマにより表記されることもある。

- (5) Betul ke budak itu menampar Razak? 【5】
 true Q kid that slap Razak
 a. Tak. Bukan Razak. Budak itu menampar Razmi(-lah).
 no not Razak kid that slap Razmi-LAH
 b. Tak. Bukan Razak. Razmi(-lah) yang budak itu tampar.⁵
 no not Razak Razmi-LAH REL kid that slap
 c. Tak. Bukan Razak. Razmi(-lah) budak itu tampar.
 no not Razak Razmi-LAH kid that slap
 「あの子供がラザクを叩いたんだって!?—いや、ラザクじゃなくて、ラズミを叩いたんだよ。」

- (6) Ada beg warna merah dan beg warna biru. Tapi, nak beli yang mana (satu)? 【6】
 be bag colour red and bag colour blue but want buy REL which one
 a. Nak beli beg warna biru(-lah).
 want buy bag colour blue-LAH
 b. Beg warna biru(-lah) yang saya nak beli.
 bag colour blue-LAH REL 1SG want buy
 c. Beg warna biru(-lah) saya nak beli.
 bag colour blue-LAH 1SG want buy
 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う(の)? — (私は) 青い袋を買うよ。」

2.2. 項焦点：疑問詞疑問文とその返答

マレー語の疑問詞疑問文では、疑問詞が平叙文における項の生起位置と同じ位置に現れる、いわゆる元位置の wh- (wh- in situ) が普通である。疑問詞疑問文でも、焦点となる疑問詞が述語部分に生起する、擬似分裂文を用いることが多い。(7a)がその例である。疑問

⁵ (5b–c)では、動詞が裸形の *tampar* で生起する。これは、*menampar* のように能動態標識 *meN-*が付加した動詞形はその目的語の移動を阻止するため、生起できないからである。

の焦点小辞 *kah* は, (7a)のように, 述語部分には生起できるが, (7b-c)のように, 主語に付加することはできない。(7d)では, 焦点となる疑問詞が主語である。

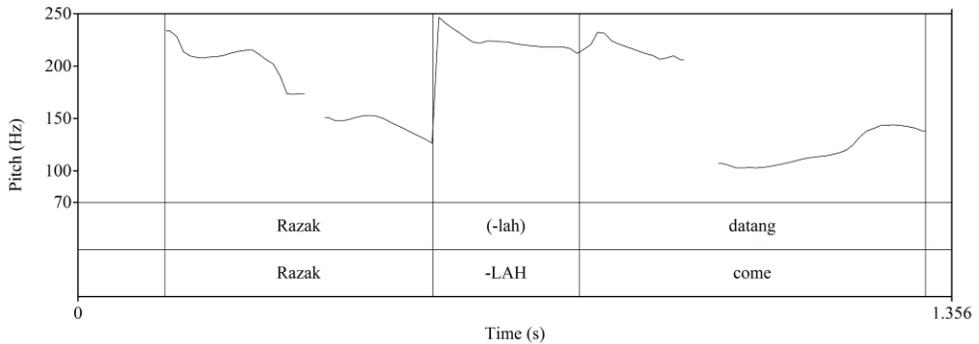
- (7) a. *Siapa(-kah) yang datang?* 【2】
who-Q REL come
b. **Siapa yang datang-kah?*
who REL come-Q
c. **Siapa-kah datang?*
who-Q come
d. *Siapa datang?*
who come
「誰が来た (の) ?」

(8)は, (7)に対する返答である。(8a-b)は中立的な返答である。疑問詞に対応する返答部の *Razak* が擬似分裂文の述語位置に生起する。

- (8) a. *Razak(-lah) yang datang.* 【2】
Razak-LAH REL come
b. *Razak yang datang-lah.*
Razak REL come-LAH
c. *Razak-lah datang.*
Razak-LAH come
d. #*Razak datang.*
Razak come
「ラザクが来たよ。」

一方, (8c)は, 聞き手もラザクのことを知っていることを話し手が知ってることを含意する。もし聞き手がラザクのことを知らずに(8c)が発せられた場合, 「ラザクって一体誰なの?」と問い返したくなるという。さらに, (8c)が返答として成立するには, 焦点部である *Razak* に続く *lah* に下降調のイントネーションが必要となる。これは同様の統語構造を持つ(2d)と同じである ((3)参照)。

(9) (8c)のピッチ曲線図



(8d)は、Razak を焦点とする、(7)に対する返答としては不適切である。

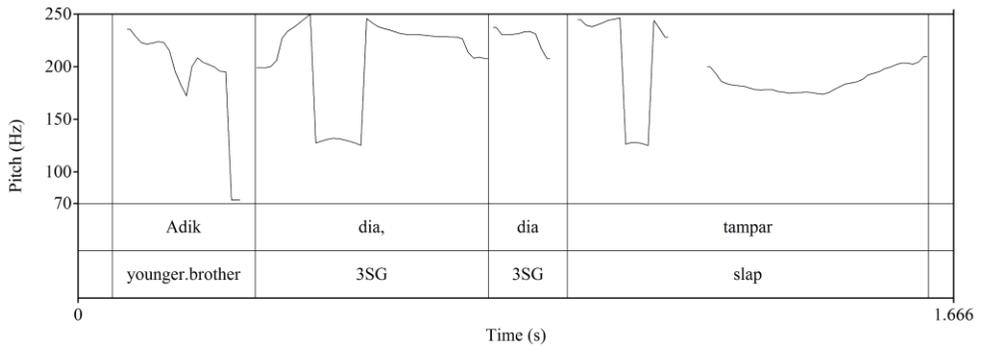
(10)は、焦点部である疑問詞が目的語の例である。(10a)と(10c)は非分裂文、(10b)は擬似分裂文である。疑問詞の統語的ステータスの面では、(10a-b)は元位置の wh-の文、(10c)は疑問詞が前置した文である。(10c)のような文は、文法的ではあるものの、元位置の wh-の文に比べ、実際の使用頻度は低い。

- (10) a. Dia tampar siapa? 【8】
 3SG slap who
 b. Siapa(-kah) yang dia tampar?
 who-Q REL 3SG slap
 c. Siapa(-kah) dia tampar?
 who-Q 3SG slap
 「彼は誰を叩いたの？」

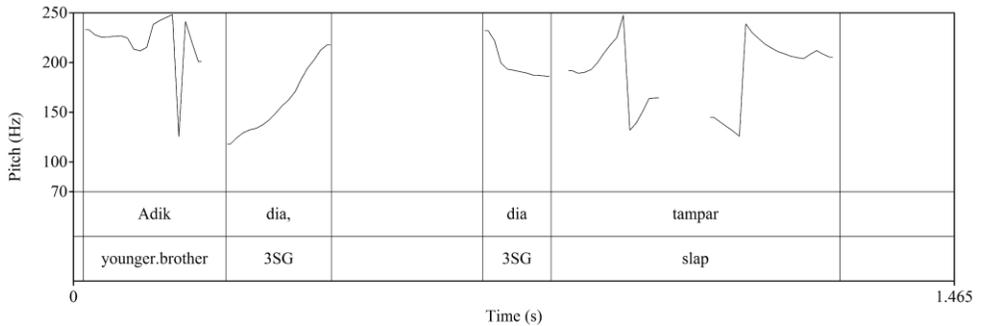
(11)は、上の疑問文に対する返答である。各文の統語構造は、疑問文と対応している。

- (11) a. Dia tampar adik dia(-lah). 【8】
 3SG slap youngersibling 3SG-LAH
 b. Adik dia(-lah) yang dia tampar
 youngersibling 3SG-LAH REL 3SG slap
 c. Adik dia(-lah), dia tampar.
 youngersibling 3SG-LAH 3SG slap
 「彼は自分の弟を叩いたんだ。」

(13) a. (11c)のピッチ曲線図 (adik dia は焦点)



b. (12b)のピッチ曲線図 (adik dia は主題)



2.3. 述語焦点

(14)は、述語全体が焦点となる疑問詞疑問文とその返答である。疑問文と返答(14a)では、通常の平叙文の語順である。(14b)は、焦点部分である動詞句を前置したものである。その結果、述語+主語の倒置文となっている。このような構文は、マレーシア語の表現としては可能であるものの、アイシャ自身は用いない。年配者が好んで用いる印象がある。

(14) Razak tengah buat apa? 【7】

Razak PROG do what

a. Razak dari pagi lagi sudah keluar(-lah).

Razak from morning still already go.out-LAH

b. (*)Dari pagi lagi sudah keluar(-lah) Razak.

from morning still already go.out-LAH Razak.

「ラザクはどうした？—ラザクは朝からどっかへでかけたよ。」

2.4. 命題焦点

命題が焦点となる場合は、特別な構文はなく、(15B)のように、通常の平叙文が用いられる。

(15) [電話で]

【9】

A: Apa yang berlaku?/ Apa dah jadi?
what REL happen what already happen

B: Hmm, Razak tampar adik(-lah).
hmm Razak slap younger.brother-LAH

「何があったの？—うん、ラザクが（自分の）弟を叩いたんだ。」

lah がある場合、B は A がラザクがいつも弟を叩くことを知っていると思っている。その結果、例えば、「聞かなくなつて分かるでしょう？また、ラザクが弟を叩いたんですよ」のような意味になる。

焦点部分が出来を表す場合、(16b)のような単純な主語＋述語構文でなく、(16a)のような複雑存在文（complex existential sentence; Nomoto 2006）が用いられる。複雑存在文では、存在動詞 ada の後に存在する個体を表す名詞句とその名詞句を項とする述語が続く。

(16) [電話で]

【4】

Kenapa ni?
why this

a. Hmm, ada tetamu datang(-lah).
hmm be guest come-LAH

b. #Hmm, tetamu datang(-lah).
hmm guest come-LAH

「どうしたの？—うん、今、お客さんが来たんだ。」

ちなみに、(16b)のような単純な主語＋述語構文は、例えば次のような文脈では自然である。

(17) A: Kenapa ni? Ada tetamu datang ke?
why this be guest come Q

B: Hmm, tetamu datang.
hmm guest come

「どうしたの？お客さんが来たの？—うん、今、お客さんが来たんだ。」

3. 名詞述語文

3.1. コピュラ文

マレーシア語には, *adalah* と *ialah* という 2つのコピュラが存在する. ただし, 口語体では, これらのコピュラがなくても, たいてい文が成立する.

2つのコピュラの相違については, マレーシア国内では規範的・教育的な側面からしばしば言及される. 記述的な研究としては, 正保 (2003), Asmah (2009), Uzawa (2009), Yap (2011) などがある⁷. 2つのコピュラに関する筆者の理解は以下の通りである. 基本的には, *adalah* は主語の持つ特性 (property) を説明する. 一方, *ialah* は主語の指示対象と述語の指示対象が同一であることを表したり, 「～は何かと言うと」といったように, 主語が表す特性を持つ個体の正体を明かすときに用いられる. より専門的に述べるならば, A *adalah* B では, 意味的に A は述語 B の項である ($[[B]]([A])$; 措定文 (predicational sentence)). それに対し, A *ialah* B では, A も B も項で *ialah* 自体が 2項の同一性を表す述語のように働く ($[[A]] = [[B]]$; 同定文 (identificational sentence)) か, B が述語 A の項である ($[[A]]([B])$; 指定文 (specificational sentence))⁸. そのため, *adalah* の後にはさまざまな統語範疇が観察されるのに対し, *ialah* の後に生起するのはもっぱら名詞句や文である⁹.

以下に見るように, 実際の使用実態は複雑である. これは名詞句が指示的にも非指示的にも解釈できることが多いことが主な理由である. 以下では, *adalah/ialah* の主語を A, *adalah/ialah* に続く部分を B と呼ぶ. 「述語」という用語は, 主語に対する述語 (文法上の述語) でなく, 項に対する述語 (意味上の述語) の意味で用いる. また, コピュラがある場合とない場合を比較するために, コピュラなしの場合を \emptyset で示す. 書かれる際には, \emptyset の位置にコンマが用いられることも多い.

⁷ その他, Nomoto (2013a: 129) は, *adalah* が複数名詞の総称解釈を可能にすることを報告している. また, Moeljadi (2015) がマレーシア語と方言関係にあるインドネシア語のコピュラの使い分けについて論じている.

⁸ この記述は, 2種類の *ialah* が存在することを意味する. この記述の不経済性を解決する手段の 1つは, A *ialah* B の A の解釈の際にタイプ転換 (Partee 1987) を想定することである. A が述語で B がその項である用法を基本とすると, A が個体を指示するような場合は, その個体と同一であることを表す述語「A であるもの」に転換される. 実際には, A の部分にはこの意味を持つ, 自由関係節 *yang* ~ が生起することが多い. タイプ転換は統語的にこの構文が許されない場合, すなわち「~」の部分が名詞句の場合に, 最後の手段として起こると考えられる. この分析が正しければ, *adalah* と *ialah* の本質的な違いは, 項と述語の登場順序ということになる.

⁹ 規範的な記述では, 2つの意味関係の違いよりも, 「*ialah* の後は名詞句», 「*adalah* の後は名詞句以外」のように統語範疇により違いが強調されていることが多い (例えば, Nathesan (2004) など). 前者は間違いではないが, 後者は記述的に不適切である. この規範的規則は学校で教えられており, 意識的にそのように修正する話者も多いようである. その結果, *ialah* の過剰使用が生じる.

3.1.1. 措定文

(18)–(20)は、A が指示対象を持つ項で B が述語の例である。(18)では、冒頭の説明通り、*adalah* のみが容認される。

- (18) Buku yang baru dan tebal itu Ø/adalah/*ialah mahal. 【18】
book REL new and thick that Ø/ADALAH/IALAH expensive
「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」

口語であれば、(19)のように、2文目の主語を言わなくても成立する。冒頭の説明によれば、このタイプの文では *ialah* は用いられないはずだが、(19)–(20)では容認される。*cikgu* と *orang Jepun* の解釈が *adalah* の後と *ialah* の後では異なる可能性がある。(20)では、*adalah* と *ialah* では用いる状況が異なる。紹介文中など、*ayah dia* 「彼のお父さん」が初出の場合には *ialah* がよい。それに対し、*Yang mana satu ayah dia?* 「彼のお父さんはどの人？」のような質問に対する返答など、*ayah dia* 「彼のお父さん」が所与 (*given*) の場合には *adalah* がよい。

- (19) Orang itu Ø/adalah/ialah cikgu. Sudah berkerja di sekolah ini 【12】
person that Ø/ADALAH/IALAH teacher already work at school this
selama tiga tahun.
for three year
「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

- (20) Ayah dia Ø/adalah/ialah orang Jepun.
father 3SG Ø/ADALAH/IALAH person Japan
「彼のお父さんは、日本人だ。」

3.1.2. 同定文

(21)は、A も B も指示対象を持つ項の例である。この場合も、*ayah dia* 「彼のお父さん」が初出の場合は *ialah*、所与の場合は *adalah* が自然である。

- (21) Ayah dia Ø/adalah/ialah orang itu. 【13】
father 3SG Ø/ADALAH/IALAH person that
「彼のお父さんは、あの人だ。」

冒頭の説明では、A も B も指示的な場合には *adalah* は用いられないはずである。しかし、*adalah* が用いられるのは、A が所与の場合、(21)で *adalah* を使った文は2つの指示対象の

同一性を述べているのではなく、ayah dia「彼のお父さん」についてその所在を説明する文だからである。Bの部分の orang itu「あの人」で意味的に重要なのは、修飾要素の直示表現 itu「あれ」であり、主要部 orang「人」は重要ではない。（この場合、orang「人」は ayah「お父さん」から含意され、自由関係節を使って yang itu「あそこにいるの」のようにも言える。）つまり、当該の文の意味は「彼のお父さんはあそこにいる（のだ）」とパラフレーズできる。

(22)は、(21)に基づいた倒置文である。

- (22) Orang itu(-lah) ayah dia. 【14】
 person that-LAH father 3SG
 「あの人が彼のお父さんだ。」

(23)は定義文である。adalah も ialah も可能である。(21)と同じようなことなのだろう。すなわち、ialah の場合は、lusa が指す日と hari selepas esok が指す日の同一性を述べることで、lusa を定義する。それに対し、adalah の場合は、B の名詞句のうち、A の lusa「あさって」により含意される hari「日」は無視され、修飾要素の selepas esok「明日の後の」だけが解釈されるような形になる。つまり、adalah を使う文の意味は、Lusa itu adalah selepas esok「あさってというのは明日の後だ」でパラフレーズできる。adalah 文は被定義項の持つ特性を述べることで、定義を行うというわけである。

- (23) Lusa itu Ø/adalah/ialah hari selepas esok. 【15】
 day.after.tomorrow that Ø/ADALAH/IALAH day after tomorrow
 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

ちなみに、lusa itu「あさってというのは」の itu は、「あの、その」という通常の指示詞の用法でなく、「(その)～というのは」のように、先行する名詞句の指示対象を発話行為参与者に何らかの関係があるものとして扱うことで、より主観的に述べる用法である。

以下の(24)–(25)は、A と B が同一人物の別名であるような例である¹⁰。Lat は、マレーシアの有名な漫画家で、Mohammad Nor Khalid は彼の実名である。Datuk は称号である。(24)のように、A がペンネーム、B が実名の場合、ialah のみが可能である。これは冒頭の説明通りである。それに対し、(25)のように、A が実名、B がペンネームの場合、ialah だけでなく adalah も容認される。adalah を用いる場合には、Lat は「ラットというペンネームを

¹⁰ Higgins (1979)は、このタイプの文を同一性文 (identity sentence) と呼び、同定文 (identificational sentence) と区別する。

持つ」とか「(あの有名な漫画家の) ラットである」という述語として機能していると考えられる。

(24) Lat *Ø/*adalah/ialah Datuk Mohammad Nor Khalid.
Lat Ø/ADALAH/IALAH Datuk Mohammad Nor Khalid.
「ラットはダト・モハンマド・ノー・カリッドだ。」

(25) Datuk Mohammad Nor Khalid *Ø/adalah/ialah Lat.
Datuk Mohammad Nor Khalid Ø/ADALAH/IALAH Lat
「ダト・モハンマド・ノー・カリッドがラットだ。」

これらの文で興味深いのは明示的なコピュラが義務的な点である。adalah/ialah のない文は、たとえ A と B の間にポーズがあっても不適合である。このようなケースがあるので、Øを単に adalah や ialah の省略と考えるべきではない¹¹。

3.1.3. 指定文

(26)は、特性を表す名詞句が主語に来る例である。この場合、(26d)のように専用の yang ... tu 構文を用いる。

(26) a. #Orang Jepun ayah dia.
person Japan father 3SG
b. *Orang Jepun adalah ayah dia.
person Japan ADALAH father 3SG
c. #Orang Jepun ialah ayah dia.
person Japan IALAH father 3SG
d. Yang orang Jepun tu ayah dia.
YANG person Japan TU father 3SG
「日本人 (なの) は、彼のお父さんだ。」

(26a)のように、単純に特性を表す部分を前に置いた文は、別の解釈であれば容認される。1つ目は、「彼のお父さんは日本人だ」という意味の倒置文としてである (cf. (22))。2つ目は、orang Jepun「日本人」が特性でなく個体を指し、文脈上特定されるある日本人が ayah dia

¹¹ 同様のことが、能動態標識 meNが生起しない能動文や、類別詞が生起しない数量名詞句についても言える (Nomoto 2013b)。

「彼のお父さん」と同一人物であることを表す文としてである。(26c)は, orang Jepun「日本人」が総称的に解釈され,「一般に日本人であれば,その人は彼のお父さんである」という,かなり特殊な解釈ならば容認可能である。

(26d)の yang ... tu 構文は口語体に特有な表現である。関係節の主名詞に音形を持った名詞句が生起せず,指示詞の(i)tuが「その」という指示性を失って,一つの構文となったものである。音形を持った主名詞と指示性を保った ituが生起する例は,(18)を参照されたい。

特性を表す部分が名詞以外の場合は, yang ... tu 構文のような特殊な構文でなく,通常の yang 自由関係節を用いることができる。

- (27) Yang penting ialah sokongan dan pengaruh yang di-curahkan-nya kepada
REL important IALAH support and influence REL PASS-put.in-3SG to
apa yang di-gerakkan oleh Tun Mahathir untuk menyingkirkan Najib.
what REL PASS-move by Tun (title) Mahathir to expel Najib
「重要なのは,ナジブを辞めさせるためにトゥン・マハティールが推進してきたこと
に対して彼(=アヌワル)が捧げてきた支持と影響力である。」
(<http://shahbudindotcom.blogspot.jp/2016/03/ketepikan-cerita2-lama-beban-semasa.html>,
アクセス日 2016/05/17)

形容詞句は述語として機能するものの,本来ならば主語位置に立つことができない。しかし,自由関係節により,その述語の意味をそのまま保ったまま,名詞句の一部として主語位置に生起することができるようになる(注8も参照)。

3.2. ウナギ文

いわゆるウナギ文では,主語に(統語上の)述語の表す特性が当てはまるという解釈に加え,語用論的に拡張された解釈が存在する。「私はウナギだ」を例にしよう。前者の解釈は,夏目漱石の『我輩は猫である』のごとく,ウナギである話者が自分の属性について述べる場合である。語用論的に拡張された解釈は,例えば,レストランなどで話者が注文したものがウナギであることを述べる場合である。この場合,「私はウナギだ」は「私{の/は}注文したものはウナギだ」や「私はウナギを注文した者だ」のようにパラフレーズできる¹²。

ウナギ文はマレー語でも可能である。ただし,語用論的に拡張された解釈では, adalah や ialah のようなコピュラは用いることができない。

¹² 西山(2003)は前者のパラフレーズに沿ったウナギ文の分析を提案している。

(28) [何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて]

【16】

Saya Ø/*adalah/*ialah kopi.

1SG Ø/ADALAH/IALAH coffee

「私はコーヒーだ。」

同じ状況では、以下のように言うこともできる。

(29) Saya punya, kopi.

1SG POSS coffee

「私のはコーヒーだ。」

(28)–(29)の語順を入れ替えたも可能で、それぞれ(30B), (31)のようになる。(30B)は逆行ウナギ文である。

(30) [注文した数人分のお茶が運ばれて来て]

【17】

A: Siapa yang pesan kopi?

who REL order coffee

B: Kopi (tu) Ø/*adalah/*ialah saya.

coffee (that) Ø/ADALAH/IALAH 1SG

「どなたがコーヒーですか？—コーヒーは私だ。」

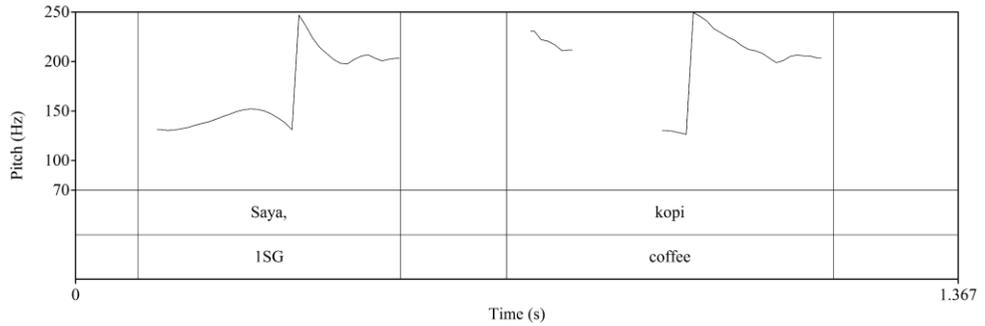
(31) Kopi (tu), saya punya.

coffee (that) 1SG POSS

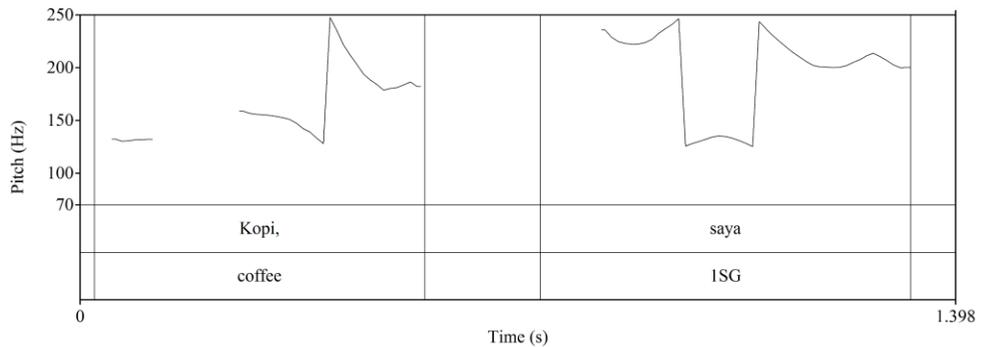
「コーヒーは私のだ。」

(30B)は、「コーヒーだ、私は」という倒置文ではない。これはイントネーションから分かる。述語のイントネーションは、(32a)の kopi のように、終わりから2音節目(ko)が高く、最終音節(pi)が低くなる。自然な会話では、(32a)のように、さらにその後に感情を表すうねりが入る。一方、(30B)の kopi はこのようなイントネーションではなく、むしろ(32a)の主語の saya と同じパターンになっている。

(32) a. (28)のピッチ曲線図



b. (30B)のピッチ曲線図



4. その他

アンケート項目の残り 2つは意外性 (mirativity) に関わるものである。話者の予測に反することを表すには、(33)のように、談話小辞の *lah* や *pula* (口語では *pulak*) を用いることができる。 *lah* は、(34)のように、思い出しを表すのにも用いることができる。

(33) [砂糖の入れ物を開けて]

【19】

- a. Hah, gula dah habis(-lah)!
- oh sugar already finish-LAH
- b. Hah, gula dah habis *pulak*!
- oh sugar already finish PULA
- 「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

- (34) Petang ni, sepatutnya harus jumpa seseorang. Siapa ya... Aa, iya-lah! 【20】
 evening this supposedly should meet someone who yes oh yes-LAH
 Tanaka(-lah).
 Tanaka-LAH
 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！田中君だったな。」

参考文献

- Asmah Haji Omar. 2009. *Nahu Melayu Mutakhir (Edisi Kelima)*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Chafe, Wallace L. 1976. Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics and point of view. In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*, 25–55. New York: Academic Press.
- Goddard, Cliff. 1994. The meaning of *lah*: Understanding “emphasis” in Malay (Bahasa Melayu). *Oceanic Linguistics* 33: 145–165.
- Hamblin, Charles. 1973. Questions in Montague grammar. *Foundations of Language* 1: 41–53.
- Higgins, Francis R. 1979. *The Pseudo-Cleft Construction in English*. Garland.
- Mashudi B. H. Kader. 1981. *The Syntax of Malay Interrogatives*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Moeljadi, David. 2015. Nominal predicate constructions in Indonesian. The 19th International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL 19)での発表論文.
- Nathesan, S. 2004. *Kata Bersinonim dalam Bahasa Melayu*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.
- Nomoto, Hiroki. 2006. *A Study on Complex Existential Sentences in Malay*. 東京外国語大学修士論文.
- Nomoto, Hiroki. 2013a. *Number in Classifier Languages*. ミネソタ大学博士論文.
- Nomoto, Hiroki. 2013b. On the optionality of grammatical markers: A case study of voice marking in Malay/Indonesian. In Alexander Adelaar (ed.) *Voice Variation in Austronesian Languages*, 123–145. Jakarta and Tokyo: Universitas Katolik Indonesia Atma Jaya and Tokyo University of Foreign Studies.
- Partee, Barbara H. 1987. Noun phrase interpretation and type-shifting principles. In Jeroen Groenendijk and Martin Stokhof (eds.) *Studies in Discourse Representation Theory and the Theory of Generalized Quantifiers*, 115–143. Dordrecht: Foris.
- Rooth, Mats. 1992. A theory of focus interpretation. *Natural Language Semantics* 1: 75–116.

- 正保勇. 2003. 「マレーシア語のコピュラ *Adalah* と *Ialah* に関する一考察」『東京外大 東南アジア学 8』, 1-18. 東京外国語大学.
- Uzawa, Hiroshi. 2009. A study on the pragmatic functions of *ialah* and *adalah* in Malay. In Yuji Kawaguchi, Makoto Minegishi and Jacques Durand (eds.) *Corpus Analysis and Variation in Linguistics*, 315-338. Amsterdam: John Benjamins.
- Yap, Ngee Thai. 2011. The structural status of *ialah* and *adalah* in Malay. In *Prosiding Persidangan Linguistik ASEAN (PLA) V (CD-ROM)*.

